一般口演

「文政二年村上玄水解臓記」について

森　博

杉田玄白、前野良沢らの人体解剖から四十八年後の文政二年（一八一九）三月八日、中津藩の村上玄水が、九州では初めての人体解剖を行っている。その解剖記録は公刊されないまま長く村上家に埋もれ、小川鼎三「明治前日本解剖学史」には、断片的な記載があるにすぎない。先年、大分県中津市に村上医家史料館が開かれたが、所蔵古文書の中に、玄水自筆の解剖記録の草稿があることがわかった。その正本はまだ発見されていない。昭和十一年十一月発行の中外医事新報には、日本医史学会例会で、横山健堂が村上玄水について講演し、解剖記録と図二葉を供覧したことが報道されている。これが「文政二年村上玄水解臓記」の正本であったと思われる。幸い、横山健堂・富士川游・藤浪剛一によってそれぞれ写本がつくられており、特に富士川本は極めて忠実に写しとられているもののようである。また、玄水草稿では解剖図が下絵のままで彩色されていないが、富士川・藤浪の両写本では着色されている。なお横山本は図を欠いている。これら草稿と写本との発見によって、玄水の解剖記録の復元が可能となった。当日の模様は次の通りである。

文政二年三月七日、二十一、二歳の男性が刑に処せられ、屍体が村上玄水に下賜された。藩では、刑場に小屋を設けて雨に備え、周囲に垣をめぐらすなどして援助している。春暖のため腐敗することを避け、解剖は早朝から始め夕刻に終わっている。医師五十余名が立ち会っている。玄水は、解剖にあたっては乳糜管を観察したいと念じていたが、脂肪が多く見ることができなかった。解剖図を二葉にとどめたのは、宇田川榛斎「医範提綱」の銅版付図が精巧であり、あらためて写生をするには及ばないと判断したためであるという。なお画工が解剖図を完成させないままに死去したため、助手が写しとって彩色した。

関係資料に若干の説明を加えたい。

○中津藩　大分県中津市。福沢諭吉の出身藩である。藩主は奥平氏。三代昌鹿は蘭学を好み、前野良沢を召し抱え、これを長崎に遊学させるなど、援助を惜しまなかった。五代昌高も洋風趣味に徹し、中津辞書の刊行、玄水の解臓などを援けた。またシーボルトの江戸参府に同行し、シーボルトに蘭語であいさつをしたと伝える。

○村上玄水　家は代々、藩の典医で、文化八年、父の後を継いだ。文政二年、解臓を行ない、その記録「解臓記」の完成に約九年を要している。文政十三年、宇田川榛斎に解臓記を献呈した模様であるが、両者の会見は実現をみなかった。天保十四年、六十一歳で死去。

○「解臓記」草稿　隷書体で書かれた約三千八百字の漢文。罫紙十五丁。標題は「解臓記并道原」となっている。全体に朱で添削が加えられており、帆足万里によるものであろうか。解臓文・解臓記・自序・付録道原などから成り、解臓文は祭屍の文で死者の冥福を祈ったもの、解臓記が解剖記録で、手順と簡単な所見を記し、自序は西洋医学の進歩をたたえ、付録道原は医の原理を説いたもの。なお村上医家史料館には、帆足万里から寄せられた序文や宇田川榛斎あて書簡の下書きなども残っている。

○中外医事新報第一二三六号　横山健堂の講演として「玆に供覧するのが、その解剖記録であって、挿図二葉、訳語は医学提綱付図に則っている」旨の記載がある。

○明治前日本解剖学史　玄水の解剖については、寛政初年の項に「村上玄水が中津の長浜にて解剖した（片山東籬の画、帆足万里序の解剖図説が残っているという。筆者はその図を瞥見したのみで未だ詳細をしらべ得ない）」と、また文政二年の項にて村上玄水、福岡に於て解剖を行う」とある。寛政初年、および福岡に於ては、文政二年、中津が正しい。ここに「解剖図説」が登場するが、玄水の解臓記の正文が図説となっていたかどうかについては、他に資料がなく不明である。

○三つの写本　写本はいずれも、玄水草稿の朱による添削文を写しており、作成は昭和十一年以降と考えたい。

1、旧富士川本＝冊子型、十八字詰め十一行、二十四ページ。彩色図あり。脱落なし。慶応大学古医書センター蔵。

2、旧藤浪本＝巻子型、一行十八字詰め二百三十四行。

彩色図あり。二カ所に脱文が認められる。武田科学振興財団蔵。

3、旧横山本　長府毛利編纂所原稿用紙を使用。二十字詰め二十行、十二枚。図なし。脱落やや多し。東京都立中央図書館蔵。

（財　京都工場保健会）

クルムス著『解剖学表』一七四五の図について

酒井　恒

一九八四年八月末、演者はドイツ連邦共和国デュッセルドルフ大学の図書館においてJ.A. Kulmus 著 Anatomische Tabellen（一七四五）を閲覧する機会を得たが、写真撮影、複写は厳禁であった。同書の一七三二年版を持ち合わせておらず、両者を直接比較することはできなかった。

本書の扉ページには次頁のように印刷されている。これを同書の一七三二年版（大鳥蘭三郎所蔵）のそれと比較した。

単語の配列に一部変化がみられ、出版地及び出版社名が異なっている。

記憶をたどりつつ図譜のみを Ontleedkundige Tafelen（一七三四）のそれと比較してみた。Ontleedkundige Tafelen（一七三四）は、現在わが国に四種類が現存し、扉ペ